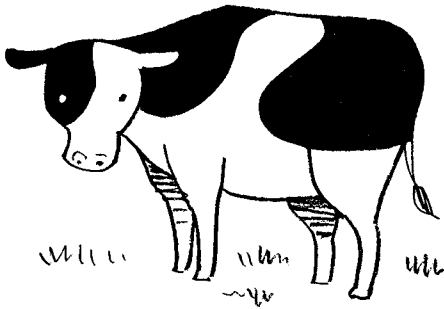


宰相の名は「牛買いの名人」というフランス流のユニーク

アリスティ・ブリアンといえば、第二次大戦前、外交問題に敏腕を振るったフランスの政治家。そのエキセントリックな性格を物語るこんなエピソードがある。

このブリアン、あるとき政見発表会に臨んだが、出番を待っているあいだ聴衆にさつぱり反応がないのにいらだつていた。やがて自分の番がくると、ブリアンは「見ていたまえ、きつとぼくが沸かしてみせるから」といって演壇に上つていった。そして、「三分しやべつたあと、とつぜん一人の男をにらみつけると、血相すさまじく「やじるな」とどなりつけた。男が「何もいわない」というと「いや、やじつた」「やじらない」で押し問答となり、ついにブリアンが「諸君、この無頼漢をつまみ出してくれたまえ」と激昂する。で、人々はついにその男を追い出してしまった。これで会場はすっかり活気づき、あとは打つて変わったように拍手の連続だった——と。

さて、このブリアンには、こともあろうに「牛買いの名人」というニックネームがあつて、そのいきさつはこうである。あるとき彼が牛市の見学に出かけると、一頭のメス牛が目についた。一目で気に入ったので、売り値を聞いてその通り金を払おうとすると、牛売りの男が「閣下は値切ろうとなさらないので？」といった。「値切らなくてはいけ



ないのかね」「ここではそういうしきたりになってますんで」「しかし、わたしはついぞものを値切ったことはないね」といったやりとりがあつて「でも、わたしがなぜ値切らないか、わけを聞かせよう」とブリアン。牛売りの男が不思議そうな顔をするのにかぶせて「じつは、得をしたのはわたしのほうなんだ。この牛は近いうちに二頭の子供を産むからさ」「まさか、ご冗談を」と牛売りは信じなかつたが、事実この牛はその後二頭の子を産んだのだつた——こうして、わが国の「鈍牛首相」とは似て非なる「牛買いの

名人」なるニツクネームが生まれた。

さいごに、彼のいまひとつの硬骨漢ぶりを伝えるエピソードとして、同じ称賛でも「勲章」だけはいかなるものでも受けなかつたことである。また彼の政治家としての功績は「国際協調主義」を唱えたことだといわれるが、彼は生涯を独身で通した。

「女性との協調」のほうはあまり期待しなかつたらしい。